



初期カール・シュミットの法思想と風刺文 —特に『影絵』(1913年)について—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 誠 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/211

初期カール・シュミットの法思想と風刺文

—— 特に『影絵』(1913年)について ——

佐 野 誠

(法 学)

Die Rechtstheorie des frühen Carl Schmitt und seine satirischen Texte

—— unter besonderer Berücksichtigung der
„Schattenrisse“(1913) ——

Makoto SANO

Rechtswissenschaft

Abstract: Im folgenden Aufsatz behandelt der Verfasser die Bedeutung des von Carl Schmitt und Fritz Eisler geschriebenen satirischen Textes „Schattenrisse“. Im Jahre 1913 veröffentlichten Schmitt und Eisler ihn unter dem Pseudonym „Johannes Negelinus mox Doctor“. Mit dem Pseudonym Johannes Negelinus verweisen sie auf Art und Ursprung ihrer Satire im deutschen Humanismus (Ernst Hüsmert). „Schattenrisse“ ist eine Parodie auf die zeitgenössischen Literaten. Im Text verspotten sie 12 „Schatten“, d.h. Nietzsche, Pipin der Kleine, Anatole France, Thomas Mann, Wilhelm Ostwald usw. Seine große Bedeutung liegt in der Satire auf den zeitgenössischen Literaturbetrieb und die zeitgenössische Kulturindustrie, d.h. der Kritik des modernen Kapitalismus.

Key words: Schmitt, Eisler, Satire, Schatten, Schattenrisse, Literaturbetrieb, Katholizismus

目 次

はじめに	24
1 『影絵』(1913年)の成立事情と内容	24
(1) 『影絵』(1913年)の著者・表題・出版社について	25
(2) 『影絵』の内容	27
① 総論	27
② 各論(ブイヨン, 私の兄=ニーチェ, トーマス・マン, アナトール・ フランス, シェーファー, オストヴァルト, 小ピピン)	29
2 『影絵』の内容解説	35
結びにかえて	40

はじめに

カール・シュミット（1888～1985年）は風刺文に長けていた。彼はシュトラースブルク大学卒業後の1910年から20年の間に若干の風刺文を書いている。『広辞苑』によれば、風刺文とは「遠まわしに社会・人物の欠陥や罪悪などを批判する」文章のことである。であれば彼は何を風刺・批判したのだろうか。

初期シュミット（1910～20年頃）の著作や論文についてはあまり知られていない⁽¹⁾。「ナチスの桂冠法学者」や「ナチスのイデオログ」などと称されてきたシュミットのイメージからすれば当然のことと言えよう。因みに処女論文は「技術的には正当な手術の構成要件該当性と違法性」（1910年）で、手術の違法性阻却を考究した刑法論文である⁽²⁾。学位論文は『責任と責任の種類について』（1910年）⁽³⁾、大学教授資格取得論文は、わが国でも比較的知られている『国家の価値と個人の意義』（1914年）である⁽⁴⁾。

初期の著作・論文の中で風刺文と言われるのは、1913年にユダヤ人フリッツ・アイスラーとの共著で出版した『影絵』、1918年に雑誌『ズンマ』に寄稿した「プリブンケン」、そして1920年に出版されたフランツ・ブライ著の『文学動物大百科』の「ファッケル・クラウス」の項である⁽⁵⁾。結論を先取りすれば、『影絵』ではニーチェの妹エリザベートやトーマス・マンらの市民的商業性をパロディー化し、「プリブンケン」では日記をつけ続ける教養文士を皮肉ることで、近代の個性信仰・事実信仰・歴史主義・業績主義を痛烈に揶揄している。また「ファッケル・クラウス」の項では、論敵を嘲笑・風刺することで生活の糧を得ているオーストリアの詩人にして随筆家カール・クラウスの生きざまを間接的に批判しているのである。

本稿では、以上のシュミットの風刺文の中から特に『影絵』を選び、初期シュミットの風刺文の意味を考えることにしたい。対象を『影絵』に限定するのは紙幅の関係からである。「プリブンケン」と「ファッケル・クラウス」の項については別稿を用意している。また初期シュミットの法思想におけるこれらの風刺文が持つ意味についても別稿で詳しく論じる予定である⁽⁶⁾。

1 『影絵』（1913年）の成立事情と内容

シュミットは1910年にシュトラースブルク大学を最優等の成績で卒業後、1915年2月頃まで司法官試補としてデュッセルドルフに滞在する⁽⁷⁾。『影絵』はこのデュッセルドルフ時代に公刊された70頁強の著作である。この著作では、後に述べるように、当時影響力を有した12人の文士や哲学者たちの「知の在り方」がパロディー化され、間接的に批判されているのである。もっとも『影絵』の著者や出版社は匿名で記されており、「影絵」という表題の意味についても明確にはされてこなかった。それ故にここでは、この小冊子が執筆された意図や動機を、シュ

ミットの風刺文の成立事情に詳しいトミッセンやヒュスメルトの所説を参考にしつつ考察してみよう⁽⁸⁾。

(1) 『影絵』(1913年)の著者・表題・出版社について

まず『影絵』の著者は、ヨハネス・ネゲリヌス・モックス・ドクター (Johannes Negelinus mox Doctor) となっており、シュミットやフリッツ・アイスラーの名前は表紙にも本文にも一度も出てこない。もちろん著者がこの両名であることは、シュミットの妹アウグステへの書簡や談話、あるいはその後のシュミット研究でも明らかとなっている。では匿名のヨハネス・ネゲリヌス・モックス・ドクターとはどういう意味なのだろうか。

まずモックス・ドクター (mox Doctor) のモックスがラテン語の mox, すなわち「まもなく」という意味から、「まもなく博士のヨハネス・ネゲリヌス」ということになる。シュミットとアイスラーは共にシュトラースブルク大学の学友であり、アイスラー (1887~1914年) の方が若干年長である。このモックス・ドクターという名前によって、『影絵』の執筆時期が両者の学位論文提出後から学位取得までの間ということがわかる⁽⁹⁾。因みにアイスラーの学位論文の指導教授はシュミットと同じ刑法学のフランツ・ヴァン・カルカー教授であった。

次にヨハネス・ネゲリヌスという名前はどうか。ヒュスメルトによれば、この名前は16世紀の愚昧風刺書 (Epistolae Obscurorum Virorum) の著者たちから借用したとされる⁽¹⁰⁾。愚昧風刺書 (『蒙昧な人の手紙』) は16世紀の宗教改革当時、カトリックの聖職者やスコラ学者を攻撃するために、わざと悪文のラテン語で書いた風刺文である。ユダヤ文献の焼却をめぐるなされたケルン大学のスコラ学聖職者とヨハネス・ロイヒリンの闘争を契機に⁽¹¹⁾、後者側がカトリック聖職者を批判するために風刺文の武器に訴えたのである。愚昧風刺書の第1部は41の手紙から成っており、著者は主にヨハネス・クロトゥス・ルビアヌスであるが、その18番目はペトルス・ネゲリヌスの作とされている。また62の手紙から成る第2部の著者は主にウルリヒ・フォン・フッテンであるが、この58番目の書簡にはペトルス・ネゲリヌスの名前が登場するのである。ヒュスメルトは、ヨハネス・クロトゥス・ルビアヌス (あるいはヨハネス・ロイヒリン) とペトルス・ネゲリヌスの合成された名前が「ヨハネス・ネゲリヌス」であるとする⁽¹²⁾。この説は信憑性が高いが、断定はできない。というのも、『旧約聖書』以外のヘブライ語文献を破棄することを主張したために、ヨハネス・ロイヒリンに攻撃されたユダヤ人・プフェッフェルコルン (彼はキリスト教に改宗してユダヤ人伝道に尽力した) もヨハネス・プフェッフェルコルンという名前であるからである。カトリックの信仰を持つシュミットの立場からすれば、あるいはユダヤ人であるアイスラーの立場からしても、こちらの名前から借用したと考えることもできるのである。いずれにせよ、シュミットとアイスラーが執筆にあたって愚昧風刺書を念頭に置いていたことだけは間違いなからう。

ところで、アイスラーとはどのような人物であったのだろうか⁽¹³⁾。彼の父親ハインリヒ・ア

イスラー（1853～1924年）は、富くじ違反や信書の秘密違反で1906年と1907年に逮捕された経歴を持つが、広告代理店の経営や『週間ハンブルク』を始めとする様々な雑誌の編集者としてかなりの財産をハンブルクで築いていた。彼が34才の時に生まれた息子ハンス・フリードリヒ（通称フリッツ）・アイスラーは、ラウザンネ、ミュンヘン、キール、シュトラースブルク、ハンブルク、そして再びシュトラースブルクの各大学で法学を中心に学んでいる。最初のシュトラースブルク大学時代にシュミットの学友となったのである。彼の学位論文は『中傷と信用危険における法的財と結果』という刑法論文で、1911年にプレスラウから刑法シリーズの1冊として印刷に付されている。アイスラーは優秀な成績で将来を嘱望されていたが、大学卒業後は父親の会社の商事代理人として就職する。彼はハンブルクで1887年に生まれたが、国籍はハンガリーにあった。彼は戸籍局にハンブルク市民権を取得するための申請を何度もしている。しかし、ユダヤ人と父親の前科のゆえに、市当局から拒否され続けていたのである。フリッツ・アイスラーがようやく自由ハンザ都市ハンブルクの市民権を獲得したのは1914年、すなわちこの世を去る年のことであった。彼は第1次大戦勃発後の1914年9月に志願兵として異郷の地で戦死したのである。『週間ハンブルク』1914年の42号には、彼を讃える編集局員の追悼文が掲載された⁽¹⁴⁾。27年の短い生涯であった。

シュミットとの友情関係で言えば、①シュトラースブルクの学生時代にシュミットはルードヴィヒハーフェン通り15番地に住んでおり、夜はアイスラー、クルクス、ローゼンバウムといった学友らとワイン酒場で過ごしたこと、②この3人の学友と1911年に「シュネッケ」と題する小説を共同で執筆したこと、③シュミットはアイスラーの遺稿から「刑法における慣習法の意味研究序論」という論文を『全刑法学雑誌』（1915年）に公表する労を取ったこと、④『極光』の著者であるテオドア・ドイブラーとシュミットの交際の仲介者がアイスラーであったこと、そして⑤1916年に出版されたシュミットの『テオドア・ドイブラーの「極光」』と1928年に出版された主著『憲法論』は、アイスラーに献辞されていること等々⁽¹⁵⁾、二人の友情関係はアイスラーの死後まで続いているのである。ただナチズム期に反ユダヤ主義者として行動したシュミットが、親衛隊やナチ党によって親ユダヤの要素を暴露され、「オポチュニスト」のレッテルを貼られた原因の一つに、この二人の友情関係があったことはある意味で悲劇と言えよう。初期シュミットの思想や行動の中に反ユダヤ主義的要素を見出すことはほとんど困難である⁽¹⁶⁾。

著者についてはこの位にして、次に「影絵」（Schattenrisse）という表題がどのような理由から付けられたのかを考えてみよう。もともと影絵というのは人物などを模した形を灯火で照らして、壁やスクリーンなどにその影をうつす遊戯のことである。端的に言えば、影絵とは実像に限りなく近い虚像のことである。風刺された12人の内の一人であるH・オイレンベルクの著書名『影絵』（Schattenbilder, 1910年）からこの表題が付けられたというトミッセンやヒュスメルトの説は⁽¹⁷⁾、オイレンベルクの『影絵』が当時の文化人を通俗化した著作であり、文化人のポートレートであったという事実に基づいている。実際、「オイレンベルク」の項で

著者は、本書『影絵』(Schattenrisse)が、オイレンベルクによってインスピレーションを与えられ、感化されたことを感謝しているのである(S.26)。このほかキルケゴールの処女作『あれかこれか』の中に「影絵」という章があり、この章の表題を借用したというニコレッティやメーリンクの説もある⁽¹⁸⁾。確かにキルケゴールの『あれかこれか』は、この時期にディデリヒス出版から『キルケゴール全集』という形でその翻訳が刊行されている。ただ内容の類似性という点からすれば、前者の説の方が有力であろう。シュミットの『影絵』の表紙にはミーゼス博士なる匿名の人物の「影は生きている」という言葉が掲げてあるが、これなども影、すなわち12人の人物を皮肉っているように見えるからである⁽¹⁹⁾。

さらに出版社である「スキアマヒェテン出版」(Skiamacheten Verlag)も匿名である。これについても諸説があるようだが、スキアがギリシア語のσκιᾶ, すなわち「影」を意味し、マヒェテンがドイツ語のMacheten, すなわち「南米のなた」を意味することから、影をなたで斬る出版社ということになるだろう。言い換えるならば、「影である12人の人物を斬る出版社」の意味である。またこの著作がライプツィヒの有限会社オットー・マイヤーから発売されたのは、アイスラーの父親ハインリヒ・アイスラーが広告代理店を経営しており、出版業界に顔が利いたからである。このような事情がなければ、当時の文化面の有力者・大御所を風刺する書物など、若干25,6才の若者にとっては簡単に出版できなかったであろう。

以下では、以上のような『影絵』の著者・表題・出版社名の由来や意味を念頭に置きつつ、この著作の内容について吟味してみよう。

(2) 『影絵』の内容

① 総 論

『影絵』が対象とし、パロディー化した人物とは次の12名である。すなわち、W・オストヴァルト、W・ラーテナウ、G・v・ブイヨン、私の兄(ニーチェ)、R・デーメル、H・オイレンベルク、小ピピン、W・シェーファー、E・ニーゲブルト、アナトール・フランス、トーマス・マン、そしてF・マウトナー⁽²⁰⁾。またこの著作が一瞥して風刺書・パロディー書とわかるのは、小ピピンを除いた11名の「体系的一覧表」なるものが、著者たちによって作成されているからである。すなわち、A. 苦悩しているドイツ人(ブイヨン、私の兄、トーマス・マン)、B. 恋しているドイツ人(アナトール・フランス、シェーファー、ニーゲブルト)、C. にたにた笑うドイツ人(オストヴァルト、マウトナー、オイレンベルク)、D. 死んだようなドイツ人(デーメル)、E. 非ドイツ人(ラーテナウ)。

この中で「死んだようなドイツ人」とされた詩人デーメルが実際に死んだのは1920年のことである。また非ドイツ人にはアナトール・フランスやブイヨンも入るはずだが、ユダヤ人のラーテナウだけが入れられている。さらに「恋しているドイツ人」や「にたにた笑うドイツ人」という言い回しも何やら滑稽である⁽²¹⁾。

それでは誰がどの人物を担当したのだろうか。トミッセンなどは色々と詮索しているようだが、「蓋然性」の域を出ていない。シュミットはこの質問に対していつも次のように答えたという。「ユダヤの知性が生み出したものと、キリスト教の知性が生み出したものを区別することは、あらゆる教養人にとって見戯に類することである」と⁽²²⁾。すなわち、文章の内容や文体を見れば、著者がシュミット（＝キリスト教の知性）なのか、アイスラー（＝ユダヤの知性）なのかが自ずからわかると言うのである。この点に関して現時点での証拠資料と考えられるものは、シュミットが妹アウグステに宛てた1913年7月7日付書簡の次の部分である。

「私は君に以前約束しました風刺文『影絵』を送りました。特に「G・v・ブイヨン」と「小ビピン」の項目は君のお気に入りとなるでしょう。この両者の滑稽な部分は当擦りではなく、冗談と考えて下さい。W・シェーファーの逸話の揶揄も君にとってはきっと愉快なものとなるでしょうね」⁽²³⁾。

但し、ここでは3人の名前が挙げられているが、シュミットの作とは断定されていない。12の項目・人物の著者を推測することも可能だが、まずは「共著」ということで論を進めていく方が無難であろう。誰がどの項目を担当したのかは——シュミットが言うように——内容から確定していくことが先決であるし、シュミットもアイスラーも本書の対象や目的に関しては一致しているからである。彼らは「序文」において、何が重要であるかは「目次」（＝12の人物名）を見れば一目瞭然であると述べ、特に「西洋文化やドイツ史に見られる潤沢な財を、北方ゲルマン人の気質である謹厳実直さ（デーメル項参照）やガリア人の軽薄さ（アナトール・フランス項参照）との関連で呪縛すること」（S.7）がその目的であると指摘している。また「影絵はあらゆる教養人の共有財とならなければならない」という言葉が、大体どの項目にも「合い言葉」のように顔を出すことにも注意が必要である。影絵自体が影である12人の人物の風刺像である以上、この言葉が間接的に教養市民層から成り立つ社会、すなわちシュミットが後の著作で繰り返し主張する市民社会への批判の伏線となっていることは言うまでもなかろう。教養人に対する戯画は、巻末（S.57-68）に付された「非教養人のための注釈」を見ても明らかである。ここでは本書の最終目標が、教養人と非教養人を区別することにあるのではなく、むしろ教養人ないしは教養人と称する人たちの教養の独占あるいは高慢を誤謬として退けることにあるとされるのである。「非教養人のための注釈」とは本文に登場する人名や難解な言葉の注釈のことであるが、これらは非教養人を教養人の仲間に加える目的で執筆されたものである。言い換えるならば、教養人の存在自体が著者たちにとっては鼻持ちならないのである。上で見た「合い言葉」が、ここでは「影絵は【非教養人はもちろんのこと】あらゆる教養人に至るまでの共有財とならなければならない」（S.57）という表現に代わったことも、著者たちの真意がどこにあるのかが理解できよう。

そればかりではない。シュミットが市民社会への批判を意図していることは、市民階級を特徴づける「2つのB」（Bildung und Besitz＝教養と財産）の今一つ、すなわち風刺された人物

の商業性あるいは経営性——現代風に言えばコマーシャリズム——を当擦っていることから明らかである。どの項目を見ても、それぞれの人物の業績や作品それ自体が批判の対象とされているのではなく、業績や作品の通俗化あるいは商業化が誇張気味に描かれているのである。トーマス・マンやニーチェの妹エリザベートに対する風刺はその最たる例である。このような点からすれば、シュミットの市民社会批判はヴァイマル共和政期以後に形成されたものではなく、学生時代に既に基礎づけられていたと言えよう。ともあれ、以下では『影絵』の具体的・個別的な内容について考察し、風刺の意図や意味をより掘り下げてみよう。但し、紙幅の関係もあり全項目・全人物を取り上げるわけにはいかない。ここでは、比較的わが国で知られている私の兄（＝ニーチェ）、トーマス・マン、アナトール・フランス、オストヴァルト、そしてシュミットが妹アウグステの書簡で指摘したバイヨン、小ピピン、シェーファーの項を取り上げてみよう。この7人への風刺を紹介するだけでも著者の趣旨が明らかになるように思われるのである。もちろん、必要に応じてそれ以外の人物への風刺も言及することになる。

② 各 論

取り上げる7人の内、バイヨン、私の兄、トーマス・マンは「苦悩しているドイツ人」に入られているので、まずこの3人の項目を要約する。その後、アナトール・フランスとシェーファー（「恋しているドイツ人」）、オストヴァルト（「にたにた笑うドイツ人」）、そして小ピピンといった順で叙述する⁽²⁴⁾。文中に出てくる比喩の解説も兼ねた全体の解説は次章2で行なう。但し、要約する際にどうしても必要な説明文は〔 〕で挿入した。原文にはないので注意されたい。

〔バイヨン〕(S.15-16)

フランスのロレーヌ伯で、バイヨンに居城を持ったG・v・バイヨン（1060頃～1100年）は、第1回十字軍に加わり、エルサレムを陥れて王となった人物である。このバイヨンが非ドイツ人に入れられなかったのは、おそらくシュミットやアイスラーが学生時代を送ったアルザス・ロレーヌ地方（シュトラースブルク）が当時はドイツ領であったからであろう。因みにアルザス・ロレーヌ地方が再びフランス領となるのは第1次大戦終結後のことである。

さて著者は、このバイヨンを、聖地エルサレムを征服したがためにシオニストの恨みを買ひ、銀行で借金をすることのできないほど暮らし向きの悪い、落ちぶれた男として描く。彼の健康状態はかなり悪い。また家族の貴重な思い出の品々を差し押えられる可能性もある。あれやこれやで不機嫌な彼は気分転換をするために外に出るが、中々落ち着けない。そうこうしているうちに彼の前に傷病兵である年老いた物乞いが現われる。この男は彼に施しを乞う。バイヨンは何とかこの男を助けてやりたいと悩む。悩んだあげく彼は、過去にイスラム教寺院の番人を違法に殺傷することで得た3か月ごとに15ピアステル（イスラム教圏の貨幣単位）の割で前払

いされる年金をこの物乞いに委任・譲渡することを約束する。物乞いは喜び、元気になり若返る。この物乞いは実はブイヨン側にとっては敵であるイスラム教徒であった。ブイヨンは快い安堵の中で気を失うが、聖ペテロは彼の夢の中に現われ次のように言うのである。「君がした善きわざのために、君は影絵の一人として受け入れられるであろう。影絵はあらゆる教養人の共有財となるべきものだ」。ブイヨンはその後まもなく餓死するが、聖ペテロの約束は守られた。それは本書『影絵』の目次を見れば明らかであると。

〔私の兄〕(S.17-20)

私の兄とはニーチェ（1844～1900年）のことである。但し、ここではニーチェの妹エリザベートが標的にされている。ニーチェの妹は彼の死後、『ニーチェ全集』（1913年完結）の編集に携わり、ニーチェの遺稿を改竄したことで有名である。著者は、ニーチェの熱烈な読者である若い女性とエリザベートとの往復書簡の形で話を進める。若い女性は手紙でエリザベートに、ニーチェの著作の編集ではないがしろにされたニーチェの飛行術と思索する天才ニーチェが一体全体「永劫回帰の理論」とどういう関係にあるのかを質問する。またこの女性に忠実であった飼い犬ツァラトゥストラが逃げたが、いつ頃この犬が彼女の所に戻ってくるのかを知りたいと聞く。彼女にとってニーチェの理論は「あらゆる教養人の共有財とならなければならなかった」(S.18)のである。それに対して、エリザベートは兄ニーチェの飛行術への関心に昔から注目していたと言う。ニーチェはゆり籠にいた頃から既にプロペラの鳴る音を口真似し、その後何度も飛行術を実演する。落下の法則とやらを実演したのもその一つである。ニーチェの精神の高揚と並行して彼の飛行術に対する関心は頂点に達する。「船上だ！」（"Auf die Schiffe!"）という彼の有名な奇声は、飛行船のことを意味していた。またエリザベートは死後出版されたニーチェのアフォリズムの1つを紹介するが、それは空に舞い上がり、雲の中を飛ぶときにのみ偽善的なものが見えなくなるというものであった。さらに「追伸」で若い女性の今一つの問いに対して、エリザベートは「あなたの犬 [=ツァラトゥストラ] がいつ戻ってくるのか、私にはさっぱりわからない」と記して筆を置くのである。

〔トーマス・マン〕(S.48-51)

トーマス・マン（1875～1955年）の項目は、「常軌を逸したスケッチ」と副題が付けられているように、かなり厳しいマンに対する風刺である。登場人物は、トーマス・マン、キップ、そしてティップで、3人が談笑する形を取っている。後者二人の名前はもちろん偽名である。ただキップは、マンの著作を独占出版していた「フィッシャー出版」の者である。話はドラムが叩かれたり、連打されながら進行し、このドラムも比喩的な意味を持つが、ここでは話の核心のみを紹介しておこう。まずマンは、彼の高貴な芸術家としての名声が、気品など全くない、信頼するに値しない広汎な大衆に依存していることを自覚する。もし大衆の誰かが、彼の名声

を、次々と創作される作品の優秀性とは違った観点から理解するのであれば、それは侮辱であると言えよう。それに対してキップやティップは、マンに対して高貴であることよりも平凡であること、すなわち通俗性を要求する。キップは偉大な通俗性こそが今日（＝当時）の彼らにとって絶対的に不可欠なものと断言するのである。またティップは、今日では芸術よりも通俗性を支える出版〔＝出版社〕の方が重要になっていることを指摘し、通俗性を明確に認識することへの勇気をマンに要請する。このような二人の主張に対して、マンも同意し彼らと手を握る。ただマンが生存しているドイツ人中最高の芸術家と自認するのは、そのように確信しているからでも、自惚れているからでもなく、マンの崇拝者らが、彼を崇拝するにも拘らず、彼を最も偉大な芸術家とは見做さないからだと言っているのである。

〔アナトール・フランス〕(S.45-47)

この項には、アナトール・フランス(1844～1924年)の小説の登場人物や類似の設定が出てくるが、その前後関係はかなり恣意的で、不明確である。ただ著者が、『神々は渇く』(1912年)で題材とされたフランス革命や、アナトール・フランスの関与したドレフェス事件を念頭に置いていることは間違いない。またこの項目が、シュミットの作であることも文章の内容から明らかである。

さて話は、有名な榎の木——その陰でカトリック僧と大学教授が食肉販売業者の肉の価格を審議するのが常であった——が、本書の影絵のために動物園に移されることになったことから始まる。このような榎の移動には奇跡が必要なのだが、著者の若い友人には全くそのことが信じられない。影絵の著者のように中世に通暁している者であれば〔この箇所には「『影絵』はあらゆる教養人の共有財とならなければならない」という著者の註がある〕、このような状況に奇跡や神秘性がつきものであること位は知っている〔＝宗教の尊重〕。しかし、洗練された合理主義は、たった1本の榎の木の移動などに目もくれない。それはこのような合理主義が、人間を善とも悪とも、あるいは正常とも異常とも見做さず、人間性を無視しているのと全く同じである。

動物園に移され、シロクマの檻の近くに置かれた榎の木の下では、カトリック僧クワナール〔＝アナトールの化身?〕が腰を降ろしてお気に入りの本を読んでいる。彼がいつものように何気なくめくった書物のページには、霊と肉の神秘的合一にまで達する信仰を持った婦人が、肉体的苦痛をも恐れない勇敢な姿が描かれていた。またそのページの最後の方にはアナトールを賛美する一文も付け加えられていた。この箇所を読みながら彼は次のような思いをめぐらす。セーヌ河岸の古本屋〔＝アナトールの父親が経営していた古書店でフランス革命関係の書籍を中心に扱っていた〕の通りにいるのは、フリーメーソンだけだ〔＝カトリック教会の権威の失墜〕。爆弾製造工場〔＝軍部の象徴〕には自由主義分子も次第に干渉しつつある〔＝市民階級の権力の伸長〕。そして多くのユダヤ人が適齢期になっても割礼を施されないというこの現実

〔宗教儀礼の意味喪失〕。これこそ私が心から愛した共和国の姿！〔フランス革命ばかりでない〕。ドレフェス事件も私に4巻の書物〔＝アナトール・フランス著『現代史』全4巻〕をもたらしした。現在の政治状況を巧みに利用して書籍商が成功に至る鍵を手に入れようとするずうずうしい奴はどこ誰なのか？ 実際この4巻の書物などはドイツ語ですぐに出版されなければならなかったのだから。

かすかな物音でこのような夢想から覚めた彼がシロクマの檻の下を見ると、そこにはさらに小さな檻があった。その檻の格子には小さいながらも堂々とした一匹のペンギンが体を伸ばしている。弓なりになった胴体の両側にある羽の断片が、威嚇するようにパタパタという音を立てている。鋭い頭部の赤い目は軽蔑気味にクワナールを見つめている。今やこのペンギンはクワナールに黒い光沢のある背を向け、よたよたとののしりながら立ち去って行く。クワナールはペンギンがその小さな白い足跡をどのように残していったのかをはっきりと自分の目で確かめることができたのである。

〔ヴィルヘルム・シェーファー〕(S.32-36)

シェーファー(1868～1925年)は、ドイツの作家。若くして画家を志したが果たせず、小学校の教師となった人物である。逸話に勝れ、1929年には『逸話集』を出版している。シェーファーとシュミットが旧知の間柄であったことは、1912年にシェーファーの編集した雑誌『ラインラント』に彼シュミットが3つの短文を寄稿したことから明らかである⁽²⁶⁾。シュミット自身が妹アウグステに言っているように、この項は「シェーファーの逸話」に対する「揶揄」であると同時に、芸術批評家なる文筆家への批判である。但し、シェーファーを当て擦るかのよう、この項自体が逸話の形式を取っている。

話の方は、ライン川で溺れた郵便配達人の遺体と画家の遺体の対話というまことに奇妙な設定で進行する。郵便配達人は出世に浮かれて酩酊し、ライン川で溺死。画家の方は、最も影響力のある暗黒大陸の芸術批評家に皮肉っぽい批評をされたことを嘆いての覚悟の自殺。彼らの遺体はゆっくりとライン川を漂流する。彼らはその途上話に夢中になる。話の内容を再現すれば、次のようになる。

まず画家が郵便配達人に次のように尋ねる。「あなたは今までの生涯で芸術批評家と関わりを持ったことがありますか?」。郵便配達人「あったかも知れませんが、そんなに多くはありませんね」。画家「どんなに生活が保証されようが、彼ら批評家は必要悪ですよ」。郵便配達人「いや彼らは必要以上に悪です」。画家「このような調子で話を続けて行きますと、逸話は成り立ちませんね」。郵便配達人「え、何ですって?」。画家「あなたは文化を創造する人ではないようです。そもそも逸話がどんなものなのかご存じなのですか? 逸話というのは、洒落、機知、気晴らし、才気、対話、そして浪費などを伴うものです。着想のなさを飾り立てたり、思想の貧困を取り繕うこととは異なります。あなたはそういったことを知っておら

れますか?」。郵便配達人「それについてのあなたのお考えは?」。画家「私は何でもないことをあげつらったり、ファンタジーの欠如を粉飾することだと思うのです」。郵便配達人「それについてのあなたのお考えは?」。画家「あなた自身が逸話を書くべきです!」。

場面は変わり、2つの遺体はやっとのことでアケロン（冥府）に到着する。そこで彼らは到着を待ち望んでいた生真面目な影〔この影は死んだ影で、著者にとっては「興味のない」影である〕の大群に出会う。年老いたカロン（冥府の川の渡し守、死神）が1872年から1892年にかけての最後の遺体運搬を終わっておらず、アケロン（冥府）にまだ戻っていなかったからである。〔この箇所では著者は、「この逸話が1912年に書かれたもので、できるだけすみやかにあらゆる教養人の共有財とならなければならない」と言う。また註で「逸話だけではなく「影絵」一般も」という言葉を付け加えている〕。

ところで、この影の中には、寂しげに動いている、顔つきのよくない赤髭のオランダ人がいる。アケロン（冥府）に着いた画家は急いでこのオランダ人の所に行く。オランダ人の書いた絵画の値段が最高に騰貴したことを伝えるためである。但し、この画家はオランダ人に一言言い添える。すなわち、芸術批評家が芸術を理解しているかのように見せかけるために、オランダ人を利用していること、つまり芸術批評家がオランダ人の絵を称賛し、このオランダ人が成功したと主張するのは、彼らがその絵の価値、すなわち芸術を理解したからではなく、絵の価格が騰貴したからである、と。

〔 ヴィルヘルム・オストヴァルト 〕 (S.1-2)

オストヴァルト（1853～1932年）は、ドイツの化学者・哲学者。リガの工科大学、ライプツィヒ大学の各教授を歴任。1909年にノーベル化学賞を受賞した。1911年からドイツ一元論者連盟（Deutscher Monistenbund）の議長を務め、エネルギー論的一元論の主張者としても有名である。因みに、マックス・ヴェーバーは「『エネルギー論的』文化理論」（1909年）の中で、オストヴァルトのエネルギー論的一元論を取り上げ、批判している⁽⁹⁶⁾。ヴェーバーはこの論文において、「エネルギー」という特定の自然科学的な抽象形式を学問的思考一般の基準として絶対化したオストヴァルトの「世界観」を批判したのである。

ところで「オストヴァルト」の項目は、著者がオストヴァルトを風刺するために作ったコラール（賛歌）から始まる。ここではそのコラールの歌詞の全文を紹介しておこう。著者の力点がどこにあるのかが自ずからわかるだろう。

この広い世界には、たった一つ神様がお造りにならなかったものがある。

世界をしっかりと結びつけておくもの。

それがなければ世界が割けてしまうもの。

それは偉大なエネルギー。

エネルギーは生きている。動いている。

エネルギーがなければ、あらゆるものが崩れ落つ。

ああ神様、あなたもご存じない。

宇宙空間に貯えられ

我々に幸福を与えるエネルギーが存在することを。

科学は我々に教えてくれる。

エネルギーがビュヒナーが考えるような力とは一致しないのだと。

私は神様に感謝する。

私の父が一元論者として私を生み落としてくれたことを。

私のか弱い心が教会の欺瞞にひっかからなかったことを。

ああ、オストヴァルト。私はあなたに倣って生きる。

ああ、私の回りに漂うヘッケルの精神

私はあなたたちを支えましょう。

ドイツ一元論者連盟のザクセン支部の人たちが歌い出したこのコラル（！）を聞きながら、偉大な学者オストヴァルトは邸宅「エネルギー」で、毎日曜ごとの説教の準備をしている。準備をしながら彼は説教に最も重要で、共通なもの〔著者はここで、「影絵もあらゆる教養人の共有財とならなければならない」という註を付している〕がないことに気づく。その時、コラルが途絶え、彼は金切り声で妻に次のように叫ぶのである。「神のためだ！ 襟飾り、襟飾り！（das Bäckchen, das Bäckchen!）〔特にプロテスタントの聖職者が付ける制服の一部〕」と。

[小ピピン] (S.28-31)

小ピピン（714～768年）は⁽²⁷⁾、カロリング王朝初代のフランク国王（751～768年）。754年からの再度に亘るイタリア遠征によって獲得したラヴェンナ等の征服地をローマ教皇に「寄進」し、これが後の教皇領の基盤となった。ラヴェンナ西方におけるローマ皇帝権を復興したカール大帝＝シャルルマーニュは彼の息子である。このカールのローマ教皇レオ3世による戴冠（800年）は、ヨーロッパにおける皇帝理念（皇帝権と教権の統合）の基礎づけとされる。ところで、ピピンにはカール以外にカールマンという息子がいた。754年に彼ら息子たちは、教皇ステファニス2世からピピンと共に塗油を授けられた。その際、教皇は彼らの子孫以外から国王を選べないように宣言したのである。しかしカールマンは771年に22歳の若さで亡くなる。従ってカール一人が父ピピンとカールマンの死後、フランクの全権を握ることとなったのである。ただ全権を掌握するまでには、カールと故カールマンの妻子、およびカールマンの妻が保護を求めたカールの義父デシデリウスオ（ランゴバルト王国最後の王）の間に相続権をめぐる

確執があった。結局、カールは自分の妻をデシデリウスオの元に戻し、ランゴバルトを征服。ランゴバルトをフランク王国に併合するのである。

「小ピピン」の項にはこのような歴史的事実が直接的に記述されているわけではない。しかし、著者の頭の中には、小ピピンの相続権をめぐる争いやフランク王国建設に関する歴史学上の論争の存在があったことはまず間違いない。特に「非教養人のための注釈」を見れば、フランク王国をめぐる歴史家の対立〔この対立は、ガリア人とゲルマン人の人種的対立に帰着すると著者は言う〕が比較的詳しく記述されているのである⁽²⁸⁾。

ところで話の中心部分は、小ピピンと著者が対話するという形で進められている。まずピピンは、彼の家族関係がドイツにおける学問上の対立を深めたことを遺憾とする。というのも、カール大帝がピピンの妾の子であるとする噂を撒き散らす者があり、学界では混乱と憤激が頂点に達しているからである。またピピンは、自分のことが学問上の話題となっていることを光栄としながらも、高齢のために核心的な部分を忘れてしまい、いまや何も話すことはできないと率直に言う。すると著者は突然、論争・対立の渦の中にある歴史家らを揶揄する、次のような主張をピピンに向かってするのである。それは、①あらゆる人〔ここでは歴史家〕は才能のある人たちであるが、彼らは、その才能には公衆が、その思いつきには聴衆がつきもので、彼ら聴衆が足を踏み鳴らしてくれなければならないという誤った考えに取りつかれていること、②人間には民衆と天才という2つの区分しかなく、自分を心底天才と見做さない人は必然的に民衆の側に立たねばならないこと、③彼らが民衆の指導者だと自認しても、かえってその存在が民衆には邪魔になっていること、④彼らは、互いの自己主張や他者に対する称賛ないし非難によって、普遍的な判断を平板化してしまっていること、⑤彼らは、自らの作った書割の裏側に目を向けるだけで真理への衝動が満たされたとして薄笑いを浮かべ、自らを相対主義者と称すること、⑥この瞬間に、彼らは狂信的な絶対主義者と化し、自らの平板さから取り出した尺度の普遍妥当性を頑なに主張して譲らないこと、⑦このような尺度は、彼らにその同化力〔仲間意識〕の源となる客観的な共属性をもたらすこと⁽²⁹⁾、⑧彼らの存在を脅かす新たな危険〔異論〕に出くわすと、彼らはその共属性から反射的に対抗すること等々。

以上のような著者の主張が終わった後、ピピンは次のように言うのである。「全くそのとおり。私はこの種の人間を知っています。彼らは集まり、ガ－ガ－とがなり立てるのです。彼らがわめく時、彼らは自らのホルンに磨きがかかるだろうと思うのです」と。

2 『影絵』の内容解読

以上から何が言えるだろうか。私は(2)節の①「総論」で「共著ということで論を進めていく」と書いたが、ここに至って各項目「執筆者」の確定ないし推測が可能となったように思う。まずシュミットの「ユダヤの知性が生み出したものと、キリスト教の知性が生み出したものを区

別することは、あらゆる教養人にとって兎戯に類する」という言葉から、少なくともブイヨン、アナトール・フランス、小ピピンの項目はシュミットの手になると考えることができる。これらの項目はシュミットが信奉するカトリシズムの観点から取り上げられているからである。ブイヨンが擲揄されるのは、カトリック教徒（＝キリスト教徒）にとっては公敵であるイスラム教徒に施しを与えたからである。特にブイヨンが不正な手段で得た収益によってイスラム教徒の傷病兵を助けた行為は、カトリックの教理からすれば許しがたいことであった。周知のように、十字軍はイスラム教徒に占領された聖地エルサレムを奪回することに成功したが、それは第1回の十字軍、すなわちブイヨンが従軍した時だけであった。第2回以後の十字軍はイスラム教徒の反撃に会い、結局、エルサレムは再度イスラム教徒の手に落ちてしまう⁽³⁰⁾。シュミットはこのようなカトリック教徒の腑甲斐なさをブイヨンに代表させて描いているのである。それはイスラム教徒の傷病兵が年金を得る約束をブイヨンとした後、「元気になり、若返った」ということから読み取れよう。またブイヨンが不正な手段で得た年金は、カトリックの経済的エートス（それは同時にシュミットのエートスでもある）からすれば否定されるべきものである。一般にカトリックの経済的エートスの核心は、形式合理的・非人格的な資本主義的経営や営利の自己目的を否定し、利子を得る行為を不純なものに見做す点にあったからである⁽³¹⁾。

ただこのブイヨンの項目のモチーフに、『新約聖書』の「不正な管理人」の比喻（ルカによる福音書16章）があることに注意すべきだろう。ここで言う「不正な管理人」とは、金持ちの主人の財産を無駄使いしたために、主人から会計報告を出すように命じられた者のことである。この管理人は自分の将来のことを考えて、主人に借りのある者を一人一人呼び出し、彼らの債務の軽減を図るのである。主人はこの不正な管理人の抜け目のないやり方を誉め、次のように言う。「不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなった時、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる」（ルカによる福音書16章9節）と。ブイヨンの項目では、「不正にまみれた富」が「不正な手段で得た収益」となり、「金がなくなった時」が「餓死した時」となり、「永遠の住まいに迎え入れてもらえる」という主人の約束が、聖ペテロの約束、すなわち本書の「影絵の一人として受け入れられる」ということになるのである。これはまさにパロディー、シュミットの言葉を借りれば、毒を帯びた「冗談」（Spaß）に他ならない。

さて、アナトール・フランスの項目についてはどうだろうか。フランス革命を題材とした『神々は渴く』の主人公エヴァリスト・ガムランやロベスピエールが文中で皮肉られていることからしても、これを間接的なフランス革命批判と見てよいだろう。フランス革命によってカトリックの聖職者や貴族の特権的地位が剥脱され、市民階級が台頭してきたことは周知のとおりである。拙著でも触れたように、カトリックの信仰を持つシュミットは、フランス革命や人権宣言を主体的には評価していない⁽³²⁾。シュミットはむしろカトリック教会とこの教会をモデルにしたアンシャンレジームのフランス絶対主義国家の秩序原理を過大に評価しているのだ

る⁽³³⁾。このようなコンテキストを背景にして読めば、セーヌ河岸通りにフリーメーソンしかいないことや市民階級である自由主義分子が爆弾製造工場に干渉しつつあること、そしてユダヤ人の割礼拒否に見られる宗教儀礼の意味喪失は、シュミットの嘆きと理解できるだろう。カトリック教会は言うまでもなくフリーメーソンに敵対していた。またペンギンがクワナールに「黒い光沢のある背を向け、よたよたとのしりながら立ち去っていく」のも、放逐されたカトリック聖職者の嘆きの表現と見てよいだろう。黒は聖職者をシンボライズする色だからである。その意味で、白クマとペンギンの白い足跡は王家を表現しているのかもしれない。フランスの三色旗に見られるように、白は王家をシンボライズする色であった。

さらに、この項でもアナトール・フランスの市民的商業性が揶揄されている。『神々は渴く』は、1793年と94年の2年間のフランス恐怖政治の日常性を克明に描き出したものである。また『現代史』4巻もドレフェス事件(1894年)を題材にしたものである。そしてこれらは実によく売れた⁽³⁴⁾。つまり、その時々体験した政治事件を巧みに利用し、書籍商を成功に導かせる手法をアナトール・フランスは心得ていたのである。しかし著者が揶揄するのはまさにこの点である。つまり、深刻な政治事件であるにも拘らず、それを売り物にする文筆家の態度への批判である。言い換えるならば、業績主義への批判と言ってもよい。この極端な例が、文筆家E・ニーゲブルトの項(S.37-44)である。ニーゲブルトは同伴者である妻と共謀して、小説の題材を作り出すための事件を自ら進んで引き起こすのである。要するに体験自体を創作することによって、作品の大量生産を計画するのである。彼は自らが作り出した事件によって、15の小説、13の逸話、5ないし6の叙情詩、少なくとも15のアフォリズムが出来上がったと言って満足する(S.43-44)。ここには不正な手段を使ってまで業績を上げる売文家の姿が巧みに風刺されている。

次に小ピピンの項に移ろう。この項がシュミットの作と想定されるのは、皇帝権と教皇権の統合を成し遂げた小ピピンの子カール大帝のフランク王国全盛期が、シュミットの政治神学の史的原型と考えられること、また論敵に対して集团的に対抗する歴史家への揶揄が、今一つの風刺文「ブリブンケン」(1918年)で主張される「知の経営化」「知の制度化」批判の伏線と思われるからである。シュミットによれば、政治神学とは「神学的概念と法学的概念の体系的な構造的親縁性の問題」である。それは「近代国家論のあらゆる重要概念は世俗化された神学概念」という周知の命題によって表現される。特にカール大帝(カロリング王朝)に象徴される「皇帝教皇主義」という概念は、世俗化された神学概念の最たるものと言えよう。ヴェーバーの「支配の社会学」によれば、フランク王国のカロリング王朝は皇帝教皇主義的性格の典型的事例であり、その特徴は国王カリスマの有資格の担い手が、祭司によって認証されることにある⁽³⁵⁾。シュミットがヴェーバーの「カリスマ社会学」を政治神学と見做していることからしても⁽³⁶⁾、小ピピンやカール大帝のカロリング王朝がシュミットの関心領域にあったことは容易に推察できよう。小ピピンを取り上げた一つの理由も、このような関心にあったと考えられるの

である。

一方、歴史家への揶揄は、2つの意味を持つ。まず第1は、歴史家のみならず、『影絵』で取り上げられたすべての芸術家や作家への批判が含蓄されているということである。特に天才と民衆の関係は、作品を生み出す芸術家と作品を享受する民衆の関係として捉え直すことができる。著者の力点は、聴衆の存在が、芸術家や文筆家に自分が天才であるという幻想を抱かせ、芸術家を墮落させているという点にある。一言で言えば、商業主義的精神への批判である。この最も典型的な事例は、トーマス・マンの項で描かれたトーマス・マンと彼の崇拜者の関係である。トーマス・マンは自分を最も偉大なドイツの芸術家の一人に数えるが、崇拜者はそのように見ていない。ただ崇拜者である読者の存在自体が彼に偉大な芸術家という幻想を抱かせているのである⁽³⁷⁾。またここではトーマス・マンの作品の質ではなく、出版される作品の量が問題になる。キップやティップがマンに通俗化を勧めるのも、資本主義社会においては「芸術の経営化」が作品そのものよりも重要であることを彼に認識させるためである。このような通俗化＝大衆化された営利社会が著者にとって嫌悪の対象となっていることは言うまでもない。このことはシュミットの作と想定されるシェーファールの項でも言える。著者はこの項で芸術評論家と画家の両者を揶揄している。作品そのものを作り出すのではなく、他人の作品を評価することで生活している評論家と、この評論家の評価によって芸術活動を可能にする画家。画家が郵便配達人に「あなた自身が逸話を書くべきです！」と言うのも自ら創作しない評論家への当て擦りである。また著者は、芸術評論家に皮肉っぽい批評をされて自殺した画家本人に対しても批判の手をゆるめない。すなわち著者は、芸術評論家の評価を得て絵を売ろうとする画家の商売根性にも批判の矢を向けているのである。

この商業主義や営利的精神という点では、ニーチェの著作を改竄してまで『ニーチェ全集』を出版するエリザベートの精神構造も同列にある。熱烈な女性読者の「飼い犬ツァラトゥストラが逃げてしまった」というのは、エリザベートの改竄でニーチェの本質が見失われてしまったという抗議である。この女性読者がエリザベートに、ニーチェの飛行術と思索する天才ニーチェが「永劫回帰の理論」とどのような関係にあるのかを尋ねるのも、ニーチェの本質に関わる事柄である。そもそもニーチェの飛行術と「永劫回帰の理論」とは関係など全くないからである。そのほか、事件を虚構して小説の題材にするニーゲブルト、自分の著作出版に陶醉するデーメル (S.23)⁽³⁸⁾、思想自体は「がらくた」(Schmarrn)であるにも拘らず、自分の著作を誇りにする言語批判家マウトナー (S.53) 等々。作品の質よりも出版という商売に価値を見出す「影」たちが次々と風刺されているのである。

さて第2は、論敵を非難・罵倒することによって「知の制度化」を図っていく学者世界への批判である。前述したように、シュミットの念頭にはフランク王国観をめぐる歴史家たちの学派意識がある。と同時に、彼が「ブリブンケン」で揶揄した日記をつけ続けるブリブンケン、すなわち歴史と現実を同一視し、「君自身が歴史であれ！」をスローガンとする教養文士への

批判も念頭に置かれている。「ブリブンケン」で描かれた教養文士たちは、自分たちが日記に記した事柄のみを歴史的眞実とし、そのような眞実を保護するために出版・雑誌・講演等の企画、そしてそれらを統制する研究所や学会の設立を図っていくのである⁽³⁹⁾。これは小ピピンの項で言われたような、自分たちの考えのみを絶対化し、論敵が現われると集団で対抗する歴史家たちの発展像に他ならない。因みに、「ブリブンケン」では、日記に記されたことのみを歴史的眞実と見做す教養文士に対して、中世キリスト教の遺産や精神的なるものが対置されており⁽⁴⁰⁾、シュミットの信仰の一端が垣間見られるのである。

『影絵』の冒頭に置かれたオストヴァルトの項については、著者がシュミットなのか、アイスラーなのかは判然としない。ただここでも、「信仰」の観点からオストヴァルトを批判していることは確実である。オストヴァルトは無神論者であり、エネルギーの信奉者である。詩の中に登場するヘッケル(1834~1919年)も、ダーウィンの進化論に依拠した自然主義的一元論者である。ヘッケルは神の人格性や靈魂の不滅性を否定した。1906年に創設されたドイツ一元論者連盟は彼の信奉者から成り、オストヴァルトは、既述したように、一元論者連盟の議長を1911年以来務めていた。著者たちは、このようなオストヴァルトの「知の在り方」を傲慢と受け取ったのである。その意味で、詩の中にある「一元論」や「ヘッケルの精神」は風刺すべき最大の標的となっていた。ただヴェーバーが厳密な学問の観点からオストヴァルトのエネルギー一元論を批判したのに対し、著者たちの批判は素朴で、いかにも幼稚なように思われる。学者としての地位を不動のものにしていたヴェーバーと、大学を卒業したばかりの著者たちとの風格の違いと言えようか⁽⁴¹⁾。

アイスラーが執筆した項目についても少し触れておこう。ケネディによれば、ユダヤ人であるラーテナウの項目は、アイスラーの作ということである⁽⁴²⁾。もし、そうであれば、今一つの『影絵』(Schattenbilder)の著者オイレンベルクの項目もアイスラーの作ということになる。ラーテナウの項と文体が類似しており、共に近代の脱精神化や機械化の進展を批判的に取り上げているからである⁽⁴³⁾。ただこのような批判性はシュミットにもあるわけで、アイスラーの作と断定することはできない。なぜなら、シュミットは『ラインラント』においてラーテナウの『時代の批判のために』(1912年)を論評しているし⁽⁴⁴⁾、『テオドア・ドイブラーの「極光」』(1916年)でもラーテナウを取り上げ、近代の脱精神化や機械化の進展について批判的に対処しているからである⁽⁴⁵⁾。特に『テオドア・ドイブラーの「極光」』では近代の脱精神化や機械化の申し子を次のように捉えている。

「彼らは天国を地上に打ち立てようとする。天国を商業(Handel)や産業(Industrie)の産物としてここ地上に、すなわちベルリン、パリ、ニューヨークに実現しようとする。浴場設備や自動車やクラブチェア付の天国を。この天国の聖なる書物は列車時刻表ということになろう」(S.60)と。

このような既述は既にオイレンベルクの項で先取りされている。すなわち、

「影絵たちは生の営み (Leben), すなわち産業 (Industrie) を, そして近代の商業 (Handel) や取引 (Verkehr) をも肯定する。……これらのことは全くもって真実だ。このことを見抜けない人は芸術のことなど全然わかっていないのだ」(S.27) と。

若干ニュアンスは異なるが, 両者の主張の内実はほぼ同一である。『影絵』より3年遅れて出版された『テオドア・ドイブラーの「極光」』では, 「影絵」が, 天国を地上に打ち立てようとする近代人の姿として立ち現われているのである。そもそも『テオドア・ドイブラーの「極光」』は, アイスラーとの共著で執筆する計画が練られていたが, アイスラーが1914年に急逝したためにシュミットの単著となったものである⁽⁴⁶⁾。従って, シュミットがアイスラーの思考を『テオドア・ドイブラーの「極光」』に反映させても何ら不思議はないのである。この著作に見られる親ユダヤ的要素もこのことをはっきりと裏付けている⁽⁴⁷⁾。

ところで著者は, オイレンベルクの項の結末で, 次のような文章を芸術家, すなわちオイレンベルクに書かせている。

「生の営み (Leben) は石けんの泡。生の営みは夢。それ故に石けんの泡は夢であり, あらゆる夢は石けんである」(S.27) と。

この文章は著者自身の信条告白であろう。すなわち生の営みである商業や産業の産物も詰まるところ石けんの泡, すなわち幻想にすぎないということである。これはまさしく昨今のわが国における「バブル経済」の風刺ではないか。

結びにかえて

以上, 『影絵』の内容とその意味について考察してきた。シュミットやアイスラーが主張し, 批判しようとしたことをここでもう一度纏めれば次の3点に集約できよう。まず第1は作品よりも商売を重んじる芸術家や文筆家批判, 第2はそれと関連しての知の制度化や技芸の商業化の批判, 第3は反カトリシズム的要素の批判, これである。第1と第2のものは, 近代の資本主義的生活様式や経済的・技術的思考の批判 (= 市民社会批判) として1920年代の『ローマ・カトリシズムと政治形態』(1923年), あるいは講演「中立化と脱政治化の時代」(1929年)へと継承されていく⁽⁴⁸⁾。また小ピピンに見られた, 論敵に対して集団的に対抗する歴史家への揶揄は, 知の制度化・経営化を批判した「ブリブンケン」に引き継がれ, 20年代には近代議会主義批判へと連動する。つまりシュミットが『現代議会主義の精神的状況』(1923年)の中で指摘する「自由な討論が永遠の対話になる」議会主義的要素と⁽⁴⁹⁾, 論敵に対してどこまでも自己主張をし続ける学者集団の精神構造とはある意味でパラレルな関係に立つのである。もちろん, 議会議場内の党派と学界における学派は異質である。しかし, シュミットが, 近代議会主義の原理の一つとする「討論の公開性」を批判的に考察するのも⁽⁵⁰⁾, 結局は党派間の討論の永遠性, すなわち不毛性を彼が見抜いたからであろう。言い換えるならば, 「決断」の欠如

の指摘である。小ピピンに言わしめた「彼らは集まり、がーがーとがなり立てるのです。彼らがわめく時、彼らは自らのホルンに磨きがかかるだろうと思うのです」という言葉は、討論の不毛性と決して無縁ではない。

第3の反カトリシズム的要素の批判については、カトリシズムの肯定として初期シュミットの思想のバックボーンとなったものである。『国家の価値と個人の意義』（1914年）における事実に対する法（＝神法）の優位の主張⁽⁵¹⁾、「教会の可視性」（1917年）におけるアウグスティヌス評価⁽⁵²⁾、『政治的ロマン主義』（1919年）⁽⁵³⁾における「主観的機會原因論」（＝個々の主観が全能の神の地位につき、外的世界を彼自らの行動や生産活動の機会・題材として観察する）批判などはシュミットのカトリシズム信仰がその動機づけになっている。特に「主観的機會原因論」への批判は、自らの体験した政治的事件を巧みに作品に応用したアナートル・フランスや、体験を自ら虚構し、それを題材として小説や詩を生み出したニーゲブルトへの批判とも関係する。というのは、主観的機會原因論の「出来事が意味をもってくるのは、それが大きな体験もしくは天才的な着想、さもなくばロマン主義的な創造性のきっかけとなった場合だけである」（PR,S.138）という特質は、そっくりそのまま彼らにも当てはまるからである。その意味で、シュミットのロマン主義批判の視点もかなり早い時期に醸成されていたと言えよう。

ともあれ、このシュミットの反カトリシズム的要素の批判が、20年代には政治神学の主張へと発展していくのである。政治神学について拙書でも取り上げたのでここでは触れない⁽⁵⁴⁾。ただカトリシズムへの信仰が——離婚問題で教会から破門されたとは言え——終生彼の思想の根底にあったことだけは間違いない。もっとも彼の信仰とナチズム期の反ユダヤ主義的言動との思想史的關係がどうなっているのかは重い課題として残されよう。

最後に気にかかっていることを一つ述べて稿を閉じよう。それは、シュミットやアイスラーの専門とする「法学」関係者が全く風刺の対象となっていないことである。『影絵』の対象となり、具体的に名指しされたのは全て芸術家や文筆家、あるいは哲学者や自然科学者である。またシュミットに比較的近い歴史家を風刺する場合（小ピピンの項や「ブリブンケン」）には、具体的な人物名が挙げられてはいない。さらに文芸家と出版社の密接な関係として槍玉に挙げられるのは、トーマス・マンやデーメルの後盾になったフィッシャー社であり、自己と関係する社会科学系のダウンカー・フンプロット社やバウル・ジーベック社ではない⁽⁵⁵⁾。このことは何を意味するのであろうか。おそらく、シュミットやアイスラーは自分たちに当たり障りのない人物を影絵に選んだのだろう。つまり、彼らは自分たちの進路や就職に不利になるような人物を選ばなかったのである。このことはシュミットが風刺文の執筆を、本格的な学術的出発点とも言える1920年を最後に中止してしまったことからわかる⁽⁵⁶⁾。

私がこのような問題を提起するのは、権力や体制、あるいは権威に弱いという点にシュミットの難点があるのではないかということを言いたいからである。シュミットのベルリンへの志向性の強さ、ヴァイマル期にナチスに反対しておきながら、ナチスが政権を掌握するや入党

する変わり身の早さ、アイスラーを初め、多くのユダヤ人と友情関係を結びながらも、ナチズム期に反ユダヤ主義を主張する一貫性の無さ等々⁽⁶⁷⁾。実際、彼がナチスの役職を辞任せざるを得なかったのも、既に触れたように、親衛隊や党に親ユダヤ的要素を暴露され、「オポチュニスト」のレッテルを貼られたためである。シュミットの法学上の業績は大きい、栄達欲もそれに劣らず大きかった。彼の人生最大の弱点は、権力や権威に弱く、ナチズム期に「才多く徳乏しき」行動を取ったことにあると私は思っている。

註

- (1) シュミットの文献目録については、Tommissen, P., Carl-Schmitt-Bibliographie, in: *Festschrift für Carl Schmitt zum 70. Geburtstag dargebracht von Freunden und Schülern*, Hg. H. Barion/E. Forsthoff/W. Weber, Berlin, 1959, S. 273-330.; Tommissen, P., Ergänzungsliste zur Carl Schmitt-Bibliographie vom Jahre 1959, in: *Epirrhosis Festgabe für Carl Schmitt*, Hg. H. Barion/E.-W. Böckenförde/E. Forsthoff/W. Weber, Berlin, 1968, S. 739-778. カール・シュミット, 服部平治・宮本盛太郎訳『現代議会主義の精神的地位』, 社会思想社, 1972年, 162頁以下も参照のこと。
- (2) Über Tatbestandsmäßigkeit und Rechtswidrigkeit des kunstgerechten operativen Eingriffs, in: *Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft*, Bd. 31, S. 467-478.
- (3) Über Schuld und Schuldarten – Eine terminologische Untersuchung, Breslau, 1910.
- (4) Der Wert des Staates und die Bedeutung des Einzelnen, Tübingen, 1914.
- (5) Johannes Negelinus mox Doctor, *Schattenrisse*, Skiamachten Verlag, Berlin, 1913. この著作からの引用は文中で頁数を記す。Die Buribunken, in: *Summa*, Bd. 1, Heft 4, 1918, S. 89-106. Die Fackelkraus, in: *Franz Blei: Schriften in Auswahl*, München, 1960, S. 563-564. これは1920年の作である。
- (6) 従って本稿は、「初期カール・シュミットの法思想と風刺文」の序章に当たる。なお文中下線は本稿筆者。
- (7) 初宿正典「カール・シュミット略年譜」, ヘルムート・クヴァーリチュ編, 初宿正典・古賀敬太編訳『カール・シュミットの遺産』所収, 風行社, 1993年, 395頁以下参照。
- (8) Tommissen, P., Über die satirischen Texte Carl Schmitts, in: *Politische Lageanalyse*, Hg. V. Beismann/M. J. Klein, Bruchsal, 1993, S. 339ff.
Hüsmert, E., Notizen zu wichtigsten Satiren Carl Schmitts, in: *Politische Lageanalyse*, S. 369-374. ヒュスメルトの論文は、トミッセンの上記の論文に付論として所収されている。
- (9) Hüsmert, ebenda, S. 369.
- (10) Hüsmert, ebenda, S. 370.
- (11) この点については、上山安敏『魔女とキリスト教』, 人文書院, 1993年, 163頁以下も参照。
- (12) Hüsmert, ebenda, S. 370.
- (13) アイスラーについては、Tommissen, ebenda, S. 374ff. に依拠した。
- (14) Tommissen, ebenda, S. 376.

- (15) Kennedy, E., Politischer Expressionismus, in: *Complexio Oppositorum über Carl Schmitt*, Hg. H. Quartisch, Berlin, 1988, S. 234, Anm. 4, S. 240. (栗原良子訳「政治的表現主義」, ヘルムート・クヴァーリチュ編, 初宿正典・古賀敬太編訳『カール・シュミットの遺産』所収, 152頁, 167頁)。Tommissen, ebenda, S. 375f. *Theodor Däublers „Nordlicht“. Drei Studien über die Elemente, den Geist, und die Aktualität des Werkes*, München, 1916 には „Im Andenken an Fritz Eisler“ とあり, *Verfassungslehre*, München/Leipzig, 1928 には „Dem Andenken meines Freundes Dr. Fritz Eisler aus Hamburg gefallen am 27. September 1914“ とある。
- (16) シュミットの反ユダヤ主義的言動については, Bendersky, J. W., *Carl Schmitt. Theorist for the Reich*, New Jersey, 1983, p. 219ff. (宮本盛太郎・古賀敬太・川合全弘訳『カール・シュミット論』, 御茶の水書房, 1984年, 第11章以下)。
- (17) Tommissen, ebenda, S. 343. Hüsmert, ebenda, S. 369.
- (18) Mehring, R., *Pathetisches Denken*, Berlin, 1989, S. 34, Anm. 63. ニコレッティについては, Tommissen, ebenda, S. 343, Anm. 17参照。
- (19) トミッセンは, ミーゼス博士を実験心理学の祖である G. T. フェヒナー (1801~1887年) の匿名としている。Tommissen, ebenda, S. 344.
- (20) オストヴァルト=科学者・哲学者, ラーテナウ=実業家, 著述家, ブイヨン=ロレーヌ伯, ニーチュ=哲学者, デーメル=詩人, オイレンベルク=作家, 小ビピン=フランク国王, シェーファー=作家, ニーゲブルト=作家, アナトール・フランス=フランスの小説家・批評家, トーマス・マン=作家, マウトナー=オーストリアの著作家。シュミットは作家であっても芸術家という言葉を使用していることが多いので注意が必要である。
- (21) こういった分類と内容はあまり関係がないように思われる。
- (22) Hüsmert, ebenda, S. 370.
- (23) Kennedy, E., Carl Schmitt und Hugo Ball, in: *Zeitschrift für Politik*, 1988, S. 152, Anm. 27.
- (24) 註(21)でも述べたように, こういった分類と内容とはあまり関係がないように思われるが, 便宜的にこの分類に従った。
- (25) Der Spiegel, Kritik der Zeit, Don Quijote und das Publikum, in: *Die Rheinlande*, Hg. W. Schäfer, Düsseldorf, S. 61-62, S. 323-324, S. 348-350.
- (26) Weber, M., »Energetische《 Kulturtheorien in: *Wissenschaftslehre*, 4Aufl. Tübingen, 1973, S. 400ff.
- (27) 以下の小ビピンの説明については, 堀米庸三『中世の光と影(上)』, 講談社, 1978年, 133頁以下。増田四郎『ヨーロッパとは何か』, 岩波書店, 1967年, 133頁以下。鈴木宣明『ローマ教皇史』, 教育社, 1980年, 140頁以下などに依拠した。
- (28) *Schattenrisse*, S. 65ff.
- (29) この客観的な共属性とは, *Schattenrisse*, S. 65ff. からすると, 歴史家たちの学派性あるいは党派性ということになろう。なお, 和仁陽『教会・公法学・国家——初期カール=シュミットの公法学——』, 東京大学出版会, 1990年, 150頁も参照のこと。
- (30) 堀米庸三『中世の光と影(下)』, 講談社, 1978年, 25-26頁。
- (31) この点については, 拙著『ヴェーバーとナチズムの間——近代ドイツの法・国家・宗教——』, 名古屋大学出版会, 1993年, 229頁。
- (32) 拙著, 205頁註(60), および279頁。
- (33) 和仁, 前掲書, 171頁以下。

- (34) 大塚幸男によれば、翻訳に利用した『神々は渴く』の1923年の流布版は、260刷ということである。
大塚幸男訳『神々は渴く』、岩波書店、1977年、3頁。
- (35) Weber, M., *Wirtschaft und Gesellschaft*, 5Afl., 1980, S.689. (世良晃志郎訳「支配の社会学Ⅱ」, 創文社, 1963年, 525頁)。
- (36) Tommissen, P., Bausteine zu einer wissenschaftlichen Biographie, in *Complexio Oppositorum über Carl Schmitt*, SS.78-79.
- (37) シュミットは一見トーマス・マンがこのことを自覚しているかのように描くのだが、結局は全く自覚していないということを言いたいのである。
- (38) 「序文」で北方ゲルマン人の謹厳実直さの代表にこのデーメルを指示しているが、これはデーメルの頑固で融通がきかない性格を指しているようである。
- (39) Die Buribunken, S.90, S.97, S.101.
- (40) Die Buribunken, S.91, S.105.
- (41) アイスラーの場合は大学に在学中であったかもしれない。
- (42) Kennedy, E., Carl Schmitt und Hugo Ball, S.152, Anm.27.
- (43) *Schattenrisse*, S.12, S.27.
- (44) Kritik der Zeit, in: *Die Rheinlande*, S.323-324.
- (45) *Theodor Däublers „Nordlicht“*, S.64-65.
- (46) Kennedy, E., Politischer Expressionismus, S.239. (栗原良子訳「政治的表現主義」, 前掲書150-151頁)。
- (47) たとえば、『デオドア・ドイブラーの「極光」』において人種理論を揶揄する次の言葉参照。「人種理論のロマン主義全体は同ような、つまりは形態学的な思弁に依拠している。自らを進んで現実政治家と称する人たちは、自然科学的な、いわば正確な人種の区別をしているようだが、根本的には道徳的な解釈を行なっているのである」。Theodor Däublers „Nordlicht“, S.15.
- (48) *Römischer Katholizismus und politische Form*, 1Afl. 1923, Hellerau, 2Afl., 1925, München/Rom. (小林公訳「ローマカトリック教会と政治形態」, 『政治神学再論』所収, 福村出版, 1980年, 125-170頁)。Das Zeitalter der Neutralisierungen und Entpolitisierungen (1929), in: *Der Begriff des Politischen*, Berlin, 1963, S.79-95. (長尾龍一訳「中立化と脱政治化の時代」, 『危機の政治理論』(清水幾太郎責任編集「現代思想1」)所収, ダイアモンド社, 1973年, 133-148頁; 田中浩・原田武雄訳「中性化と非政治化の時代」, 『合法性と正当性』所収, 未来社, 1983年, 141-169頁)。
- (49) *Die geistesgeschichtliche Lage des heutigen Parlamentarismus*, 1Afl., 1923, 2Afl., 1926, München/Leipzig. (樋口陽一訳「現代議会主義の精神史的状況」(1923年版訳), 『危機の政治理論』(清水幾太郎責任編集「現代思想1」)所収, ダイアモンド社, 1973年, 49-111頁; 服部平治・宮本盛太郎訳『現代議会主義の精神史的地位』(1926年版訳), 社会思想社, 1972年; 稲葉素之訳『現代議会主義の精神史的地位』(1926年版訳), みすず書房, 1972年)。ここでは2Afl., S. 58.
- (50) Ebenda, S.61f.
- (51) *Der Wert des Staates und die Bedeutung des Einzelnen*, S.37.
- (52) Die Sichtbarkeit der Kirche. Eine scholastische Erwägung, in: *Summa*, Bd.1, Heft 2, 1917, S.78-79 (拙訳「カール・シュミット: 教会の可視性」, 『浜松医科大学紀要』, 第7号, 1993年, 101頁)。
- (53) *Politische Romantik*, München/Leipzig, 1Afl., 1919, 2Afl., 1925. (橋川文三訳『政治的ロマン主義』(1919年版訳), 未来社, 1982年; 大久保和郎訳『政治的ロマン主義』(1925年版訳), み

すず書房, 1970年)。PRと文中に略記。

(54) 拙書。第6章。

(55) シュミットのほとんどの著作はドゥンカー・フンプロット社から、ヴェーバーのほとんどの著作はパウル・ジーベック社から出版されている。ドゥンカー・フンプロット社とパウル・ジーベック社の社会的関係および文学モデルネについては、上山安敏『神話と科学』, 岩波書店, 1984年, 147頁以下。

(56) なお, シュミットは「ジプシー」(Der Zigeuner)という風刺文を1920年前後に書いたようだが活字になっていない。Tommissen, Über die satirischen Texte Carl Schmitts, S.361.

(57) シュミットのナチ党入党の経緯などについては、山本尤『ナチズムと大学』, 中央公論社, 1985年, 122頁以下。

[追記] 資料については、東京大学の和仁陽先生と大阪国際大学の古賀敬太先生のご好意を得た。この場を借りて厚く御礼申し上げる。